

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
October 2017

No.25 【特集】
「地域資源」の活かし方

「地域資源」はトヨタ財団の3つの助成プログラムに共通するテーマです。本号では地域に内在するさまざまな資源に新たな価値を見出し、その活用と次代への継承を目指して活動する各プロジェクトからの現場レポートを掲載。地域社会における課題解決への多様な取り組みを紹介します。





Photo by Kenta Kusuda

2日間にわたる東アジア市民社会フォーラムの後、エクスカージョンとして良洞民俗村を訪れました。慶州市中心部から約25kmに位置するこの村は、現在も人々が普通に暮らし続けながら、500年以上にわたって李朝時代の伝統文化や家並みの面影を今に残しています。2010年には村全体がユネスコの世界遺産に登録されました。(本誌 P.27参照)

CONTENTS

FIRST WORD ● 山極壽一
大学はジャングル …… 2

山岡義典さんに聞く①
兆しを見つけ、兆しに賭ける！ …… 4

特集：「地域資源」の活かし方

私たちの活動——助成対象者からの寄稿

国内助成プログラム ● 井栗秀直
自然と共にある暮らしを
実現できる地域として …… 9

国内助成プログラム ● 菅原賢一
生きがいのある、
山間地域の存続を目指して …… 11

研究助成プログラム ● 伏屋智美
人々が文化遺産をつなぎ、
文化遺産が人々をつなげる …… 13

国際助成プログラム ● 吉川 舞
「地域が創る観光」で地域の暮らしが輝く …… 15

活動地へおじゃまします！〈京都府南山城村童仙房〉
「他者」たちが集まり未来を紡いでいく …… 18

国際助成プログラム
2017年度 プロジェクト一覧 …… 22

「私」のまなざし ⑩ イヴァン・ボテフ
ヨーロッパ最古の街で
参加型の絵本をつくる …… 24

お茶っこ通信 第六回 ● 加賀 道
「準喫茶カガモク」がオープンしました！ …… 26

トヨタ財団ジャーナル …… 27

これは世論とお金だ。京都大学には毎年5000人近い学生が入学してくる。高校を卒業したばかりの学生もいれば、他の大学で学び、高度な学問を学ぼうと大学院に入学してくる学生もいる。それぞれに大きな期待を京都大学に抱いているし、自分が将来活躍する姿を夢に描いている。そして、大学卒業後に彼らを受け入れる産業界や省庁などさまざまな組織も、大学で彼らが身に付けてくる能力に高い関心を示す。さらに、イノベーションの創出を指している企業や、たくさんの課題を抱えている自治体なども、大学で新しい発想や解決策が得られることを期待している。これらの期待や大学に対する信頼があつて、多くの優秀な学生が入ってきてくれるのである。

その期待に応えるためには、最先端の学問を実施できる環境と世界で活躍する高度な知識と技術を持った研究者を擁しておくかねばならない。科学技術はどんどん刷新されるので、それにとりま

い設備や装置は最新のものに入れ替える必要があるし、新しい知識や考えを持つ研究者の交流の場を用意しなくてはならない。そのため設備費や研究費は膨大な額に上るし、電光熱費や電子ジャーナル購読費など必要経費は年々増加している。ところが、国から支給される運営費交付金は年々削減されている。これからは、寄附や産業界からの投資を促進して大学の自己資金を増やして行くことが不可欠になる。

地 球規模の気候変動や環境汚染によって、ジャングルは崩壊の危機にある。同じようにグローバルな世界の動きと財政難によって大学も存亡の危機にある。新しい種とイノベーションを創出する源泉を今支えなければ、地球の未来も日本の将来もしぼんでしまうのではないだろうか。大学の総長はそのフィクサーであり、知の猛獣たちに力を発揮させる仕掛け人である。ぜひ、大学という生態系を維持すべく努力したいと思う。

こ れらの膨大な数の植物や動物たちは、互いのことをよく知っているわけではない。密接な関係を保っている種もあるが、全く関係を持たず、出会ったこともない種もたくさんいる。しかし、ジャングルは一つの生態系として安定を保っている。大木が倒れたり、外からたくさんの渡り鳥がやってきたとしても、すみやかにその変化は修正され、調和と安定を取りもどす。それは、ジャングルが豊富な光と水に恵まれているからである。植物の生育に光と水は不可欠だ。その植物が提供する葉や果実や樹液

そ う、大学はジャングルと同じように常に新しい種、すなわち学問が生まれる場所なのである。それは、さまざまな学問が出会い、教員たちが自分の領域を超えて対話し、新しい考えを生み出そうとしているからだ。そして、新しく生まれた学問は大学を飛び出して、その能力を世界で試していく。京都大学が日本各地にたくさんの研究所やセンターを持っているのは、新しい学問の種子を発芽させようと努力してきた結果である。霊長類研究所や生存圏研究所、こころの未来研究センター、野生動物研究センターなど、新しい学問の気風に満ちあふれている。

そういった大学における多様性や調和を安定的に保とうとすれば、ジャングルの豊富な光と水に匹敵するものが必要である。そ

大学はジャングル

京都大学総長 山極壽一

を食べている植食動物たち、そしてその動物たちを食べる肉食動物たち、動物たちの排泄物や死骸を食べる分解動物たちが調和を保っているのがジャングルなのである。

そのジャングルのあり方に、京都大学のような総合大学はよく似ている。まず大学は多種多様な学問から成り立っている。京都大学には10学部、18大学院、35の研究所や教育研究センターがあつて、3000人も教員が日夜自分の学問分野で独自の考えに磨きをかけている。それぞれの教員はよく知り合つて共同研究をする間柄もあるが、全く会ったこともない人たちもたくさんいる。しかも、全く関係なさそうな学問でも、どこかで繋がっていて、ときとして予想もしなかったような分野が結びつくことがある。例えば、それまで無縁だった発生学と医学が結びついてiPS細胞研究という新しい学問分野が生まれ、山中伸弥さんがノーベル賞を受賞するようなことが起こる。

●やまぎわ・じゅいち
1952年東京生まれ。人類学・霊長類学者。京都大学総長。著書は『家族進化論』(東京大学出版会)、『「サル化」する人間社会』(集英社インターナショナル)など多数。近刊に驚田清一氏との共著『都市と野生の思考』(集英社インターナショナル)がある。

”自らの価値観を実現するために活動することを、とりあえず「市民活動」と呼んでみた“

——まずトヨタ財団での活動を中心に、これまで山岡さんが取り組まれてきたことについて教えてください。

僕は1977年にトヨタ財団に入り、74年にできて75年から事業が始まりました。3年度目の事業から担当したわけです。専務理事の林雄二郎[※]さんには76年にお会いしました。林さんは財団についてフィランソピー、第三セクターとかいろんな言葉で説明してくれました。それらが日本に欠けていると。日本に新しい非営利セクターをちゃんと作っていくためにトヨタ財団をどうするかということで、人を探していたとおっしゃる。僕は環境、都市計画、建築はわかるけれど福祉や文化のことはよくわからないと言ったのです。しかし分野を超えて新しい財団のモデルを作りたいと情熱的なメッセージをいただいて、とりあえず5年くらいやってみようかと入団し、結局15年トヨタ財団にプログラムオフィサー(以下PO)として在籍しました。

僕は国内部門が担当でしたが、最初は研究助成一本で、毎年2億9千万円助成していた。担当3人で3億円近いお金を動かしていたので大変は大変だった。国際部門は金額的には1億円以下だったと思いますが、東南アジアに行き密度の高いコミュニケーションのなかから発掘型でプロジェクトを探してきました。

の応援をしていこうというのが80年代の初めの議論だった。

当時、この市民活動については何の文献も研究もなかった。ときどき新聞や雑誌に載ったイベント記事があるだけで、基本的に僕らは現場を歩いているからわかるけれども、理論構築や人を説得する材料がない。だから、まずは市民活動の記録の助成を84年から開始しました。

当初、市民活動という言葉を使おうかどうか悩みましたが、最初は冒険的すぎるということで、研究助成の特定課題としてやってみただけです。われこそはと思う団体は応募してくださいという形です。取材や執筆や出版に200万円くらい助成を出しますよと。記録を残すことが重要であると同時にわれわれ自身が勉強したかったです。

全国から100件以上の応募がきて、十数件助成しました。僕らはよく現地インビュウに行きますから、2年くらいやっていると日本全体でどういう状況かだんだんわかってくる。公募というのはアンテナをはっているようなものだからね。これはできそうだね、何かやらないといけないね、となったのですが、個々の団体の活動を助成するのは問題も多いよねということで、そういう団体をネットワーキングするような活動、あるいは関連分野の共通の財産を作る、そういう市民活動に助成をしたいと思い、記録助成をやりながら市民活動助成のプログラムを独立させて展開していきました。

そんななかで全国のいろんな人たちと親し

山岡義典さんに聞く①プログラムオフィサーの役割りについて

兆しを見つけ、兆しに賭ける！

今回、日本の助成財団におけるプログラムオフィサーの草分けであり、私どもトヨタ財団の大先輩でもある山岡義典さんをお招きして、若手現役プログラムオフィサーとの座談会を行いました。山岡さんのトヨタ財団における15年間のご経験やお考えをもとに、後輩プログラムオフィサーに対するアドバイスや期待を存分に語っていただきました。

JOINTでは引き続き、山岡さんと非営利セクターのさまざまな分野で活躍をされている若手リーダーの方々との対談・鼎談・座談会を企画していきます。乞うご期待！

した。タイやベトナムですね。当時ベトナムには企業も政府も入れなかったけど第三セクターは入れたので、現地を足で歩きまわるという方法でやっていました。国内部門は公募でやっていました。環境領域、社会福祉領域、教育文化領域の3つがありました。

最初はともかく助成対象者の「現地」をつぶさに歩いて見てまわり、いろいろと議論をし、当時はお金もふんだんに使えたので、街並み保存プロジェクトや各種シンポジウムなど、さまざまなことに挑戦しました。国際部門でも海外の人形劇チームを呼んで「アジアの子ども劇場」をやったりと……。

そうすると、研究助成では、いわゆるアカデミックな学術研究以外にも面白いのが出てくる。民間の市民レベルのノンアカデミックな研究で面白いのがもつとありそうだからというところから、もう少し掘り起こそうと、身近な環境をみつめようというテーマで研究コンクールを始めました。とりあえずやってみて上手くいけば続けようという非常に実験的な試みでした。地域に密着して、市民が長期的に研究するプロジェクトに助成をしたのです。これは結構面白かった。

80年くらいから、新しい市民の動きが活発になる。国際協力も含めて事業体としてやっていく団体がたくさん出てきた。そのころから自らの価値観を実現するために活動をすることをとりあえず「市民活動」と呼んでみた。いわゆる市民運動ではないよね、と。持続的に自分たちの価値観を実現させようとする実践を市民活動としたのです。その市民活動へ

くなつたので、ネットワーク会議を作った。助成対象者のネットワークをもとに、選考委員も加わって勉強会をやったりしました。僕自身もさまざまな講演会などで、新しい非営利法人制度ができないと市民活動が育たないと発言したりしてきました。市民活動ってという言葉もトヨタ財団のプログラムを通して、少しずつ馴染みを持つようになってきた。それが、後のNPO法の成立につながるわけです。

”ジェネラルに広い視野を持ち、つねに「その他」のことを見ていることが大事“

92年、僕は50歳でトヨタ財団を辞めましたが、研究助成でいちばん力を入れたのは、個人奨励研究でした。アマチュアというかちよつと変わった不思議な個人、市民研究者もたくさん含んでいました。個人奨励研究は、ある意味ひとつの大きな「賭け」ができる場所として面白かった。

——昔、林さんがPOはクリエイターである、サムシングクリエイティブであるべきだということをおっしゃっていましたが、それは当時のPOの方々にも共通の理解としてあったのでしょうか？

ありましたね。僕は少なくともあったし、若い人たちにもあったと思う。はじめはPOって何かよくわからないままスタートして、スタッフ会議を月1回くらいやった。林さんは毎年年報に論文を書くので、2か月くらいかけて問題を揉みあうんですけど、なに

Yamaoka Yoshinori 山岡義典

東京大学工学部建築学科卒業。元トヨタ財団プログラムオフィサー。特定非営利活動法人市民社会創造ファンド運営委員長、助成財団センター理事長・代表理事、日本NPOセンター顧問



※注：林雄二郎(1916年7月27日～2011年11月29日)。トヨタ財団初代専務理事。東京工業大学教授、未来学者。

がクリエイティブなのかいろいろと議論する、そういうプロセスがあった。そんななかで先見性・市民性・国際性という三点セットのキーワードが出てくるんだけど、林さんは初めのうちは市民という言葉あまり使いたがらなかった。当時としては毒が強すぎたんだね。

林さんが強調して言っているのは先見性ですね。POは「兆し」が読めるかどうか。その兆しに賭けられるかどうかにある、ということ言っていました。未来学は何年後どうなっているかという結果はどうでもよくて、未来の兆しを現在の社会の中に見出すのが未来学だということなんです。それが当たっているか外れているかはわからないけど、その兆しに賭けることができるのがPOであり民間の財団であると。

企業はこうやって何年後には製品ができるねとわかっていれば投資できる。行政は今いる人が利益を受けられればいい。しかし、ともに20年後を見据えてはできない。兆しを見つけてそれに賭けることができるのは民間の助成財団しかない。林さんは言っていた。POは兆しを見つけ出してその兆しに賭ける、そのために助成プログラムという枠組みと、その運営のシステムを作ること。林さんは助成プログラムひとつづつ、あるいはプロジェクトひとつづつについてはあまり口を出さなかった。それよりも兆しを見つけられる人脈を持つということ。どの兆しに賭けるかは賭けだから大化けすることもあればダメなこともある。「兆し」は未来学者としての林さ

Oの役割としてはプログラムをどう作るかや、どういうものに助成をしていくかということの方が、助成した後よりは大きいと考えた方がよいのでしょうか。

最近では、どういう枠組みで助成するかということよりも、助成をしたものと資金提供したものに對してどう成果をより高めるかとか、どう評価するかという方に社会的な関心が高まっていると思うのですが、その辺についてはどのようにお考えですか？

公的な資金はそうなくてもやむをえないと思う。たとえば、休眠預金も準公的資金ですからね。法律によってやっているし、政府が取り扱っているでしょう。だからおかしなことをやると叩かれるわけです。その意味で最終の保証をどうしてくれるかが気になるのは仕方がない。だけどNPO側からそうしてほしいというのはいかがかな。NPO側がそういうお金なんだから仕方がないよって言うのはわかるんだけど。逆手に取って面白くないかと思うのもいい。役所にとって都合いいようにすり寄っているから何かおかしいな、と。

ソーシャルインパクト評価もそうだけど、それはNPOを育てるための仕組みではない。NPOをどうやって効率よく行政が使うかっていう仕組みとして出てきているような気がする。NPOにとっては本当は迷惑な話なんだけど、お金がほしければ評価をやりなさいという。それをNPOの活動を促進するための仕組みだと思っているからおかしい。

5〜10年くらい先のスケールで見たときにあ

んの哲学かな。兆しを現代社会のなかに見出し、重要な兆しに對してそれを推し進めるための資金的なバックアップをするのが民間の助成財団の役割だということ意識があった。

POはプログラムを作るのがひとつの役割ですが、そのときにたとえば「新しい人間社会の探究」というテーマのような領域横断的で広い視野でプログラムを設計することもあるし、すごく絞ったプロジェクト的なプログラムもありますよね。たとえば明治・大正・昭和の建物の保存とか、市民活動の記録とかっていうふうには。

どちらかっていうのではなく両方必要だと思う。一方に非常にジェネラルなプログラムがあつて、もう片方に特殊解的なものもある。やはりジェネラルな大きな枠をpushしておいて、スペシアルなプログラムも持つのがいいと思う。特殊なものだけだと広がりがない。煮詰まってしまうんだよね。

プログラムの評価を明確にするために、最初から戦略的に設計してゴールを設定するみたいなやり方も一方であるかなと思うのですが。

それをやっているとその組織のアンテナが広がらなくて行き詰り、煮詰まってしまうと思う。ゴールはもっと自由でいい。

評価にとらわれることなくジェネラルに広い視野を持ち、常に「その他」のことにしていることが大事。的を絞ってしまうとその他が見えなくなってしまう。外から見るときに、あそこはこういう団体だからと決めつけられ、思いがけないような応募はされなくなっ

てしまう。助成できるかどうかは別として、ちょっと雑音が入ってくるような仕組みのほ

うが組織としてはいいと思う。

ジェネラルな視野を長期的にもちつつ、時代ごとに兆しに合わせて特殊なものを立ち上げたり、発掘型で助成したりという組み合わせがいいのでしょうか。

スタッフの成長のためにもその方がいいと思う。特殊なことだけを10年やってきましたとなると、視野が狭い人間になってしまう可能性がある。ときどきジェネラルもやって、また次のスペシアルに行くとか……。

僕らも最初からスペシアルなことをやる

と意識したわけではなくて、広い分野の研究

助成をやっているうちに、この分野って面白

そうだねって。研究助成のなかで市民研究み

たいなものが出てきて、助成してみると実際

に面白い。そういうのが出てくると、こうい

うのをもっと発掘したいけどこの枠組みじゃ

難しいというようなことがわかってくる。何

かことさらに新しいことをやろうと思つたわ

けではなく、研究助成をやりながら、ここを

もうちょっと力を入れて応援したいと思うの

をプログラムにしてみました。

”クリエイティブを

維持するためには、

人が育たないといけない”

先ほどの林先生の、兆しを読み、兆しに賭けるというのは、プログラムをどう作るかということと、どういうものを見つけてき

て助成するかの二つの段階がありますが、P

れは何だったのかなと評価分析することは重要だし、お金の使い方が変だとか私的流用とかの問題はチェックしないとけないとは思

うけど、短期間でそれでどんな成果があつたの？いくら安くできたの？と評価するのはいいんですよ。少なくとも民間の助成金では。

助成を受ける側からしてみると、最初は50万円や100万円の小さい助成を受けて活動して、次のステップで200〜300万円の助成を受ける。さらにもうちょっと活動を広げて500万円、1000万円の助成でやってみる。それで3〜4年経つとある種の事業モデルができてくる。その事業モデルを適用したらインパクトはちゃんと出る。でも最初に使った50万円でインパクトは？



言われてもね。次から次に助成金を使って活動している団体がその都度インパクトを求められても困るでしょう。そういう点では、個々のプロジェクトメイキングの話からいうと財団の助成は一通過点なんです。だからそれを経てその次どうなったか。最後に国家の助成金がついて3000万円のプロジェクトをやった。それでうまくいった、あの時の最初の第一歩はうちでやったんだよね、というんで財団の助成としてはいいわけです。

僕は「右往左往する」って言い方するんだけど、要するに財団のお金は何かをめざして右往左往するためのお金なんです。右往左往しながら、あるものはくたびれるしあるものは高みに上る。その右往左往するときにサポートしてくれる資金が必要。公的なお金で右往左往することはできない。休眠預金でもできないと思うんだよ。民間の助成金はそれができる。

最後に、今後財団に期待されることをメッセージとしてお願いします。

市民ファンド、コミュニティ財団がこれから多くの役割を果たしていくと思うけど、社会全体を見渡して自分たちだからこそできることが何なのかを見極めてほしい。

そしてトヨタ財団は、なによりも人を育てることができるとあってほしいです。プログラムがクリエイティブであることを保障していくためには人が育たないといけない。組織を維持するということだけではなく、新しいことに挑戦し、クリエイティブし続けていってください。

みなさんは「地域資源」と聞いて何をイメージされるでしょうか。

海や森といった自然や先人たちが築いた遺跡、その土地にしか生息しない生き物や、そこでしか作ることでできない伝統作物など、イメージされるものはさまざまであると思います。

「地域資源」とは、一般的に特定の地域に存在する特徴的な資源を意味し、自然資源だけでなく、その地に暮らす人々によって育まれてきた歴史や文化、建造物など人的に生み出されてきたものを含む広義的なものとして捉えられています。日頃、何気なく身に着けているものや居住している家屋、信仰している宗教や思想なども、自分たちが暮らすまちの地理的条件や地域特性に照らし合わせて考えてみると、多くの影響を受けていることがわかります。

トヨタ財団では、研究・国際・国内という3つのプログラムを通じて、生活・自然環境、社会福祉、教育文化などの領域にわたり、時代のニーズに対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対し助成を行っています。各プログラムで設定しているテーマはさまざまですが、いずれのプログラムも「地域」が重要なキーワードの一つとなっています。



特集

「地域資源」の活かし方

地域の資源とどう向き合い、課題解決に取り組むか

国内という3つのプログラムを通じて、生活・自然環境、社会福祉、教育文化などの領域にわたり、時代のニーズに対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対し助成を行っています。各プログラムで設定しているテーマはさまざまですが、いずれのプログラムも「地域」が重要なキーワードの一つとなっています。

化的資源に光をあてたり、国や地域、社会的立場や背景を超えて、人々の意識変化につながるような研究活動を支援しています。

また、「国際助成プログラム」では、「アジアの共通課題と相互交流—学びあいから共感へ」というテーマのもと、日本を含む東アジア・東南アジアの各国・地域を舞台に、アジアの共通課題の解決に取り組む人々同士が、異なる「地域資源」を有する地で培った独自の視点を集結し、互いに交流し学びあうことを通じて、新たな視点の獲得につながる取り組みを支援しています。

そして、「国内助成プログラム」では、「未来の担い手と創造する持続可能なコミュニティ—地域に開かれた仕事づくりを通じて」というテーマのもと、日本国内を対象に、市民が主体となって地域資源と向き合い、それらを活用しながら地域課題の解決に取り組む活動を支援しています。

本特集では、各プログラムの助成先の中から、「地域資源」を強く意識して活動に取り組まれている4つのプロジェクトの最新現場レポートをご紹介します。いずれも、「地域資源」の価値を問い直し、次世代への継承を視野に入れて取り組んでおられます。自分たちの地域にはどんな「地域資源」が眠っているのか。それらをどのように次世代へとつないでいくのか。国内外のさまざまな挑戦事例から、「地域資源」について読者の皆様とともに考えてみたいと思います。

特集 「地域資源」の活かし方

私たちの活動——助成対象者からの寄稿

「地域資源」の新たな価値を見出し、その活用と継承を目指して活動する4つのプロジェクト。地域のさまざまな資源を見つめるその多様なまなざしのなかに、私たちの「未来」を開く扉の鍵を探して。



2016年度国内助成プログラム「しらべる助成」
「助成題目「芦生集落まるごと資源調査」——多様な人が往来する環境保全型地域の創出へ

自然と共にある暮らしを 実現できる地域として

●井栗秀直（特定非営利活動法人芦生自然学校）

自然豊かな美山町芦生集落

京都市内から北へ50km。日本海へ流れる由良川の最源流に位置する南丹市美山町芦生集落は、関西最大規模の原生林、多くの希少生物が残る自然豊かな森林が広がり、古くは木地師や薪炭産業を中心とした林業が営まれていました。

現在は、原生林の大部分は京都大学芦生研究林となり、2016年3月に指定された京都丹波高原国定公園の核心地です。同時に、

南丹市域において過疎化・高齢化が進んでいる地域の一つでもあります。

特定非営利活動法人芦生自然学校は、2004年に芦生集落およびその周辺の住民たちが、「恵まれた自然と、その自然と向き合う中で育まれてきた山村の暮らしの文化を、多くの人々と学び、守り活かす。また、次世代を担う子どもたちに自然体験活動の機会を提供し、持続可能な社会づくりに寄与する人材を育成すること」を目的に設立し、主に青少年を対象にした自然体験事



高さ20mを超える灯籠に点火し、農作物の豊かな実りへの感謝と火の神「愛宕神社」へ火魔封じを願い、献燈される火祭り。芦生地区では「松上げ」と呼ぶ

業を行ってきました。

2015年に、これまでの10年間の活動を振り返り、ミッションや活動のあり方を検討しました。その結果、これまでの活動に加えて、豊かな自然を守り活かした芦生の人々の暮らしと、それを支える自然環境保全を主軸

にした、価値創造と経済循環を創出する「環境保全型なりわい」の実現にむけて、地元住民とIターン者らが一緒になって、プロジェクトを立ち上げることにしました。

地域資源の再発見

今年度、トヨタ財団の国内助成プログラム「しらべる助成」を活用させていただき、この芦生集落全体を改めて捉え直すための基礎調査として、地域を紐解き、地域資源の掘り起こしを多面的に行っています。

この調査を通じて、芦生への来訪者の芦生に対する満足度が高く(10点満点のうち8.9)、豊かな自然とそこでの活動に魅力を感じていることがわかりました。一方、住民は自然と共にある暮らし、集落としての暮らしに、誇りと覚悟を持っていることが改めてわかりま

した。他方で医療と教育に対する課題意識から、自分たちはいいけれど孫子にはさせたくないというを感じておられることも再確認できました。

これまで未着手だった地域住民や来訪者の思いや問題意識を定量的・定性的に把握できたこと、新しい事業を立ち上げるために雇用了した移住者が、住民と出会い、関係性を構築しながら、事業化に向けた素地を耕すことが本助成事業を通じてできつつあります。移住者が地域の担い手になるためにも、新規事業の立ち上げにとっても、小さなステップを丁寧に踏むことができるので、非常に有効的であり、効果的であると感じています。

固有の営みを守り抜く

今後事業をすすめるにあたり、今回の調査

内容を基に、この土地に根ざした営みのあり様を浮かび上がらせたいと考えています。同時に、これまで最奥地でありながらも自立的かつ持続的に自然を守り生かす暮らしを選択し、地域資源を生かした経済基盤を作るために、集落内住民自らが起業するなどしながら地域を守り続けた、高い「住民自治力」の継承もあわせて行います。

社会変化に左右されることなく、先人の知恵や技に学び、自然と共にある暮らしを来訪者と地域住民が一体となって実現できる地域として、多様な人が行き来し、かつての賑わいや活力のある環境保全地域としての芦生地域で新たな価値創出を目指していきます。



東京から芦生の森を訪れた親子へのヒアリング



2016年に「京都丹波高原国定公園 森の京都・美山の森」として国定公園の指定を受けた芦生原生林

2016年度国内助成プログラム「そだてる助成」
「助成題目」「サンソンプロジェクト」——次世代につなぐ里山のなりわいづくり

生きがいのある、 山間地域の存続を目指して

菅原賢一（特定非営利活動法人 秋田県南NPOセンター理事）



秋田の山は宝の山だ

プロジェクトが実施される「山内南地区」は、秋田県の中でも豪雪地帯の県南部に位置し、岩手県と隣接した奥羽山脈の麓に抱かれた16の山村集落で形成されている。

特産品としては「燻りガッコ」(ダイコンの燻製漬物)があり、発祥の地らしく今も季節になると家々の「燻し小屋」からは燻製の煙が立ち込め、独特の風情を放っている。

一見のどかに見える山村風景であるが、若者の流出により、約半数の集落では小学校に入学する児童がいないといった状態が続いて久しい。

農業従事者の高齢化や山間部ゆえ農地の集積が困難なことも相まって、耕作放棄地の面積は全国平均をはるかに上回る勢いで加速してきた。

この間、地域で人口増加にむけて何らの取り組みもなかったかという決してそうではない。

2015年〜2016年にかけて「お試し体験移住ツアー」を5回実施し、15人が参加、自治会の方々と地域の暮らしや風土、学校・買い物手段等について知る、移住を前提とした交流会が盛んに行われた。

その中で移住希望者の関心事は、第一に「収入に結びつく仕事」であり、第二に「雪処理」であった。

移住者にとつて空気がきれいな、自然が豊か、人情が厚いだけではすまない、暮らしていくための収入源の必要性を痛感させられた移住交流会であった。

食生活の変化や若者世代の山菜離れもあって我が国の山菜生産額は年々減少しているものの、秋田県における生産額は軒並み全国上位に入るほど豊かだ。季節になると直売所には根強いファンが並び、まちの居酒屋ではおつまみとして提供されるなど、山菜はまだまだ有望な資源だ。

ところがここに来て需給に変化が起きているのだ。高齢化率の上昇により急峻な山岳に



秋田県横手市山内地域

分け入り、山菜採取に出かける高齢者が少なくなつたのだ。加えて熊被害による風評や入山規制が追い打ちをかけた。自ずと供給が追いつかないところでは単価が上昇するところもでてきた。

山村地域の生業と担い手を育てる

林地化が進む大量の耕作放棄地は、もとはといえば山菜などの自生地であったものを、人間の都合で改変してきた土地である。

プロジェクト関係者の集まりの中で、「どうせ自然に帰すものならば山菜を栽培し山菜の一大産地化(生業づくり)を目指そうではないか」そんな参加者の一人の発言により居並ぶみんなが賛同した。地域では、これまでも小規模ながら道の駅や社会福祉法人入居者施設へわらびやウド等を納入し、わずかながらの

収入を得ていた実績があったこともこれを後押しした。

周辺に漁村があり、農村があり、山村があった。その中心で「まち」がつくられる。「まち」は周辺部の多様性で形成されている。漁村部では魚介類を捕獲し販売する。農村部では米や野菜などを育て収穫し販売する。すなわち生業が明確に確立されている。

では山村部の生業は何かと問われれば、きつと返答に窮するだろう。残された村人は近くのまちで仕事を見つけ、寝るために山村の自宅に戻るといった現状だ。

このプロジェクトでは、地域の若者はもちろんのこと、都市部の高校生や企業経営者・行政等と一緒に、山間地域の恩恵や可能性(資源と生業)を、セミナーやワーク



地域の持続性を考える セミナー&円卓会議

シヨップ形式の円卓会議を通し、流域の一体性を学びながら、山村部の生業と担い手を生み育てることとした。特に山村地域ならではの肉発的な持続可能性を追求していく。

法人格取得によるムラビジネスへの進展

山菜の多くは、栽培から収穫にいたるまで数年を要する。癖(灰汁)のある山菜は通の人にはこたえられない季節の贈り物ではあるが、食べた経験のない方にとっては、たとえスーパーに並んでいたとしても手にとるには抵抗があるだろう。

この両極端ともいえる需要にこたえていくために、販路拡大のためのさまざまな販売戦略を模索する一方で、新しい山菜の食べ方を提案する「レシピの開発」も同時に目指していく。

山菜の採取は平地であれば比較的簡単な作業ではあるが、機械化が困難であり、人手に負うところが大きい。時期、時期に最適な品質のものを提供するためには、熟練した技や経験もまた必要となるのだ。

地域にはこうした達人が沢山いる。たとえ身体に多少の不自由を抱えていても、出荷までの工程に参加することで生きがいが出され、介護予防効果が発揮されることを模索していく。

その他にも、高齢化による雪処理等の困りごとを、住民有志が「共助組合」を結成し、助け合い価格での支え合い活動を実施している。

依頼者数の増加や規模拡大により、活動拠

2015年度 研究助成プログラム

「助成題目」協働実践型の遺跡保存管理——スーダンにおける協働実践を通じた文化遺産の新たな価値と文化遺産保護——

人々が文化遺産をつなぎ、文化遺産が人々をつなげる

——コミュニティと考古学者がともに地域資源を再考する

●伏屋智美(ライデン大学考古学部博士課程)



文化遺産とコミュニティの未来を考える

スーダン北部・ヌビア地方で実施されたこのプロジェクトでは、コミュニティの児童を対象に『ヌビア中部の生活文化(原題: The Heart of Nubia)』を英語・アラビア語で作成しました。考古学者と遺跡周辺に暮らす地元コミュニティが、相互の知識を共有し、遺跡の調査で明らかになった古代の人々の営みと、現代の地元の生活文化、歴史的建物、言語、口頭伝承を地元の文化遺産として紹介する冊子です。

作成過程で有用性を実感したのは、考古学者と地元の人との視点、各々からみた文化遺産を冊子という一つの媒体で紹介することで、それまで別々に語られてきた文化遺産の異なる側面をつなげることです。文化遺産をつなげることによって、外国人専門家とスーダンの地元住民という枠組みを超え、協働で文化遺産とコミュニティの未来をともに考えてい

くことを目指しました。

地域に根づく伝承と近代化の波

スーダン共和国は、地中海、エジプト、アフリカ、アラビア半島の文化の交差点として、数千年前から独自で多様な文化が育まれ、多くの文化遺産が残されています。世界遺産「メロエ島の考古遺跡群」は、ヘレニズム、エジプト、アフリカ文化を融合した特徴的な古代ヌビア文化を示す好例です。

19世紀前半から発展したスーダン考古学は、欧米専門家、とりわけエジプト学者主導で実施されてきました。当時の考古学の調査方法を反映して、考古学の研究は遺跡周辺に暮らす人々の文化や知識と関わりなく、研究結果も積極的に地元の人々と共有することは多くありませんでした。

カタール・スーダン考古学プロジェクトの支援を受けるイギリス・大英博物館のアマラ西調査隊(Britishmuseum.org/anarawest)は、



地域の達人たちにも参加をしてもらう

点の確保や財政基盤の確立が急務となっていたが、「サンソンプロジェクト」と合わせたコミュニティビジネスの展開にあたり、法人格取得について最適な形を模索していく予定だ。「サンソンプロジェクト」はこの4月から開始されたばかりであるが、地域の期待は大きく、順調な滑り出しを見せている。

今後の展開はウエブサイト等で随時発信していきたいと考えている。



地元小学校のアマラ西遺跡の訪問の様子

発掘調査と並行して2014年から遺跡保存と遺跡周辺の3つのコミュニティ(アプリ・アマラ東、エルネッタ)に住む人々に研究成果を知ってもらおうと、ビクターセンターの建設、遺跡ガイドブックやポッドキャストの作成、公開講座や小学生の遺跡訪問などを実施してきました。また、地元の人々の考古学や遺跡に対する考えや興味を探索するため、インタビューも開始しました。これらコミュニティ研究を担当した私は、その過程で考古遺跡をただ古代の遺跡として紹介するのではなく、地元の文化遺産として語らなければならぬことに気がつきました。

独自の言語、長い歴史と文化に誇りをもつヌビア人が多数を占める地元コミュニティの人びとは、遺跡について考古学的な知識はな



くとも、彼らの歴史の一部であり文化遺産としてとらえ、紀元前1300年〜1100年にアマラ西遺跡に暮らした人びとの生活様式について、遠い過去のこととしてではなく、彼ら自身の文化との関連性、継続性をとらえていたのです。

たとえば、古代の日干しレンガの住居、パン焼き釜、石臼、葬儀に使用する木製ベッド、食文化や病気などに対して、数千年の時を経

①アマラ西遺跡と対岸や島で生活する現代コミュニティ(13ページ上写真)。②地元の歴史や文化遺産について、聞き取り調査を実施。③アマラ東村の小学校で、校長先生が冊子を配布し、児童に内容を紹介した。④地元出身の芸術学校に通うムサブ・ソルタによる表紙デザインと冊子内容

て多くが変化したことを認めつつも、共通点を見つけ、親しみを感じる地元の人々のコメントが多く聞かれました。同時に1930年代、40年代の発掘調査に地元労働者として参加した人たちの記憶がコミュニティ内で共有されていながらも、考古学の目的や方法についてはよくわからないと質問を受けました。

地元の文化遺産を取り巻く状況もわかってきました。スーダン全体の急速な社会開発の影響で、伝統文化、言語、口頭伝承、農業のノウハウなど、長年受け継がれてきた地元の文化遺産が失われつつあることを危惧する年配世代の存在があり、対照的に学校教育では、国全体の有名な人物や出来事のみが扱われ、地元の歴史や文化を知らずに子どもたちが成長し、地元で文化遺産はないとまでいう若者にも出会いました。

さらに就業機会が限られるスーダン北部において若者は、都市部やアラブ湾岸諸国へ仕事を求めて移り住むことが一般化し、地元に残る継承者自体が減少しているだけでなく、政府が計画するダムにより、コミュニティと遺跡はダム湖に水没する危機にあるのです。

冊子をきっかけにコミュニティの輪が広がる失われつつある文化遺産をどのように次世代へつなげていけるか。トヨタ財団の助成を受け、地元ボランティアの人たちと一緒に、地元の文化遺産について冊子を作成することになりました。

冊子は、今日の生活にいたるまでの古代から現代までの歴史・文化をあらわす文化遺産

をピックアップして写真やイラストで紹介しつつ、個人の疑問や発見、語りのきっかけになるように、意図的にテキストを少なくしました。子どもたちが周囲の大人に質問し、発見し、考えることを促しつつ、また大人にも子どもとの対話をきっかけに、どれほど豊富な知識や技術がコミュニティ内にまだ残り、それが失われつつあるかを再認識してもらおう機会になることを目指しました。

作成と同時に、冊子を使用した文化遺産教育プログラムについても話し合いました。2017年3月に印刷された冊子とともに、ボランティアにも加わったアマラ東村の小学

校の校長先生と一緒に、子どもたちに実際に手にとってもらい、古代の土器などに触れながら、地元文化遺産について話をしました。このプログラム内容は、冊子を各学校に配布する際に校長先生を通じて、他の学校の先生へ伝えられる予定です。

限られたプロジェクトの期間でしたが、今後につながる成果がありました。冊子の作成中と完成後、地元の学校の先生方や協力者が、この冊子をきっかけに「地元の遺産をもっと語ろう!」と今後の活動を考えはじめてくれました。またロンドンで今年5月に開催されたスーダン考古学会年次総会でもこの冊子が紹

介され、長年スーダンで調査する研究者からも「こういうことがやりたかった」とコメントをもらい、スーダン考古学のなかでも地元と協働の文化遺産プロジェクトを促す機会となり、今後の活動が期待されます。

このプロジェクトは、地元の文化遺産について異なる知識や経験を共有することで、外国人専門家と地元の人々という枠組みを超えてつながり、コミュニティと文化遺産の未来を共有していくための重要な一歩になったといえるのではないのでしょうか。

*大英博物館アマラ西遺跡調査隊は、スーダン・考古学・博物館局の許可のもと実施されています。写真はBritish Museum Amara West Research Project提供。



「地域が創る観光」で地域の暮らしが輝く

●吉川 舞(ナプラワークス)

2016年度国際助成プログラム
「助成題目カンボジア、サンボートプレクック遺跡群と沖縄県南城市におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの確立に向けた学び合い

地域に暮らす「普通の人」

地域に太く根を張って暮らすことに価値が生まれる時代がもうすぐ来る。

2017年、二つの国の境を超えてその場にいた誰もが、地域に「暮らす」資源の可能性を強く感じる瞬間が次々に生まれた。カンボジアと沖縄という一見遠く離れた二

つの地域に、「地域が創る観光」という道を選んだプレイヤーたちがいる。地域の底力を高め、地域が抱える課題を解決したいと挑戦する実践者たちが自分の地域の文脈を離れ、他の事例を共に体験することで、未来を考える国を超えたパートナーになることができるのではないか。そうした経験を積み重ねることでコミュニティ・ベースド・ツーリズムという概念をアジアの民として具現化するためのヒントが生まれるのではないか。

そんな背景と仮説の中から生まれたこのプロジェクトの醍醐味は、地域が創る観光のプレイヤーたちが皆、研究者でもビジネスマンでもなく、地域に暮らす「普通の人」というと

ころ。カンボジアの普通の村の人たちが、日本の地域が創る観光の現場を訪ねるため、パスポートを取り、ビザを揃えて、満を持して海を越えた。

プロジェクトの舞台はサンボー・プレイ・クック遺跡群と斎場御嶽という二つの世界遺産を抱える地域。どちらも世界遺産を訪ねる国内外からの訪問客が多い一方で、その周辺にある地域は素通りされ、観光と地域との間に距離ができるという課題がある。

さらに事前の学び合いの過程で、カンボジアの農村地域と日本の大都市圏から離れた地方に共通する「就業機会がないゆえの人材流出」という切実な課題も見つかった。世界遺産という巨大観光資源を懐に抱え、それが地域の力に繋がっていないという現状を前にして、遺産も含めた土地の暮らしや個性をもっと多くの人に知ってほしい、世界遺産を地域の資源として活かしたいという共通の願いが生まれた。

こうした課題と希望を携えて、日本とカン

ボジア、そしてアジアを離れたイタリアで「地域が創る観光」の事例を訪れ、実践者同士が直接対話するためのフィールドスタディを計画した。

「暮らし」たちが語る観光

第一回のフィールドスタディは日本。沖縄県南城市で普通のお宅の普通の晩御飯にお邪魔する「なんじょうナイトツーリズム」や、集落の中をその地域で育った案内人の方と歩く集落ツアー、暮らしを支える生業の体験など、その土地でしか生まれない物語を体験。

さらに世界遺産熊野古道の通ずる奈良県十津川村を訪れ、急峻な山の中にある立地を逆手にとつて、昔ながらの生活道路の一部を地域の手で整備して観光資源として提供する取り組みや温かな農家民宿、そして地域で仕事を創り、生まれた土地で暮らし続けようと奮闘する若い世代チームにも出会った。

第二回のカンボジアフィールドスタディの直前、2017年7月8日に、サンボー・プ



①森と遺跡が融合するサンボー・プレイ・クック遺跡群(15ページ上写真)。②古代の遺跡に宿る物語をたどる。③「いつもの市場の朝ご飯」に潜入。④廃校の教室を借りて地域が抱える課題を学ぶ。⑤⑥食事を共にし、歌が響いて皆踊る、アジアの食卓。⑦斎場御嶽の祈りの場で土地の人たちの作法を習う。⑧かつて暮らしの中で使われていた道を辿る。⑨普通のキッチンでサーターアンダギー作りをお手伝い



レイ・クック遺跡群が世界遺産に登録されるというサプライズが起こった。

世界遺産となって1週間のサンボーを舞台に、日本での学びを経たカンボジアメンバーたちが、遺跡に近接する村のホームステイに宿泊し、投網で魚を捕る、食材を市場や家の庭から調達するなど、地域の暮らしを構成する要素の一つひとつを村の方に指導いただきながら参加するという体験を用意した。

さらに、村の裏手の広大な古代都市があった場所を遺跡の研究者と村の人と一緒に歩くという特別な時間も用意。普通の田んぼに見える場所に研究者の視点を重ねると古代の暮らしが見えてきたり、古代の人が作った溜め池の周りの草むららが、実は現代に受け継がれる薬草の宝庫だったり、古代と現代を行き来するプログラムを堪能した。

2度のフィールドスタディを通して、それぞれの地域でその土地にคาねてからある「暮らし」たちが語る観光を体験したチームは「地域のあたりまえ」が外から訪れた人に驚きと学びを提供してくれるという確かな手応えを得た。同時に、自分の地域の文脈から離れ、膝をつき合わせて議論を交わすという、日常の中では用意できない機会を経て、チームが仲間になっていった。

地域が創る地域の観光

一つひとつの観光主体のキャパシティは小さく、そこで提供される体験も均一ではないけれど、地域の中のプレイヤーたちが相互に連携して地域全体を楽しんでもらうという総

力戦に、地域のこれからを照らす光が見えた。その光は従来の観光産業の中では置いていかれがちだった、地域に根付いて暮らししている人たちが微かに放たれている。

暮らしの中にある要素を地域の価値として提供することができるなら、一村一品どころか、一村一資源と言ってもいいくらい、多様な資源に溢れている。

その土地にある過去から現在までの物語に触れることは、訪れる人、地域の人という立場を超えて、それぞれの魂の奥底に届く、特別な体験ができる。従来型のはやく、大きく人を動かす観光よりも、小さくても地域の暮らしとともに変化する「地域が創る地域の観光」が果たす役割が、次なる未来に向けてさらに大きくなることを確信する時間になった。

サーチライトのような強い光で遠くから照らすのではなく、地域の何気ない暮らしの場面に光を灯すような観光の形をさらに求め、満を持して9月にはイタリアへ向かう。

十津川村で地域のリーダーから贈られた「地域の中で実践する過程にはいろんなことがある。山もあり谷もある。苦しいこともあるでしょう。それでも諦めずに頑張ってください」という言葉がチームの背中を押してくれた。イタリアを経て、そこから何が生まれてくるか、今から楽しみでならない。

活動地へおじゃまします! 京都府南山城村の童仙房を訪ねて

「他者」たちが集まり 未来を紡いでいく

◎新出洋子（トヨタ財団広報グループ）



【訪問地】
京都府南山城村 童仙房地区

【助成題目】
教育における時・空間の統合の
研究—京都府・童仙房地域を中
心にしたフィールドから学べる
もの—



広大な茶畑

生涯教育の概念を見直す

今回は、前平泰志氏（畿央大学・教授）が代表を務める研究助成プログラム2015年度助成プロジェクト「教育における時・空間の統合の研究—京都府・童仙房地域を中心にしたフィールドから学べるもの—」の第一回研究報告会（昼の部と夜の部を開催）に出席させていただきました。会場となったのは2006年に廃校になった野殿童仙房小学校。廃校後の跡地活用を模索していた地区住民の方々は、当時京都大学で教鞭を執っていた前平氏にはたらきかけ、その結果野殿地区、童仙房地区が自主的な取り組みとして同大学院教育学研究科と提携し、野殿童仙房生涯学習推進委員会を設立しました。この縁を機に前平氏は10年以上にわたり地域住民と協働してさまざまな活動を続けてこられ、トヨタ財団では2015年度に2年間プロジェクトとして助成を開始しました。

助成プロジェクトでは、「教育」とは、学校という空間の中において就学期間中という限られた時間内に行われるだけでなく、その人の生涯にわたって行われる自己形成のプロセスであり、また、それは地域社会と不可分の関係にあるということを実証的に明らかにしよう



7月某日、京都府南東端に位置する京都府唯一の村、南山城村の童仙房という地区を訪れました。同地区へは京都駅から車で2時間強。お茶の産地として有名な和束町を通過し、三重県、滋賀県にもまたがる三国越林道を通っていくと、標高約500mの山頂付近に集落が忽然と現れます。

童仙房は江戸時代までこの藩にも属さず、無人の山でした。まだ旧幕府軍と新政府軍が戦っていた1868（明治元）年に京都府が開拓を計画、翌年には開拓に着手し入植が開始され、廃藩置県が行われた1871（明治4）年に162戸の童仙房村として開拓が完了しました。当時は一戸につき田んぼ四反、畑八反、山林二反が与えられて開墾が進みました。ピーク時には200戸を超えていたそうですが、離村が進み、1912（大正元）年には47戸までに減少します。そのうち戦後の開拓で再度人口が増加。1953（昭和28）年の南山城大水害を乗り越え、現在は80戸余り・200人弱が暮らしています。（2016年7月の調査結果より）

としています。

個人の誕生から死までの各時期における教育を関連づける「時間的統合」と、あらゆる教育機関や機会を関連づける「空間的統合」を包含しようとする生涯教育の理念は、必ずしも研究や実践に結実したとはいえません。たとえば、教育が行われる空間である「学校—家庭—地域社会」の構図は、これだけが強調されると個人の時間軸が見過ごされてしまいます。一方、ライフストーリーに関心が強く注がれる場合、その個人が生活する空間にまで視点が向くことがなかったのです。

前平氏の研究プロジェクトチームでは、これまでの断片的な生涯教育の概念を見直すことにより、より広い時間と空間の中で人間形成がなされていくことの理論化をめざしています。

童仙房地区での報告会

この日の報告会では、これまで童仙房地区で住民の方々にヒアリングを重ねてきた地区の歴史、食に関する伝統、子どもの教育などについて研究チームのメンバーから発表がありました。お昼の部は住民の女性たちが来やすいようにとの配慮で16時からの開催。男性や小学生も含めて15人ほどが旧野殿童仙房小学校の校舎に集まりました。まずは前平氏から「童仙房の時間と空間」というタイトルで報告があり、童仙房の研究をするというときに歴史の研究だけで良いのかという問いかけから、ここで暮らす人の歴史と現在、モノの歴史と現在、自然の歴史と現在を調査することは、すなわち住民の方々と話すこと・聞くこと、場所（空間）の歴史、時間と農・食について調査することで



プロジェクト代表の前平泰志氏



旧野殿童仙房小学校

あると、これまで活動してきた内容と、研究プロジェクトチームが取り組んできたことをわかりやすく説明してくださいました。

生駒佳也氏(徳島市立高校・教諭)は、『他者』たちの村の歴史』というタイトルでの報告。童仙房の特徴として住民組織が一番から九番までの地区をもとにした「組」を基礎としていること(自治会のような役割をもつ)、また開拓の順番自体が通称の地名にもなっていること、講がないことなどを挙げ、村の開拓の歴史、年長者の方から聞き取りをしたことを中心にお話しされました。発表タイトルの「他者」たちは、童仙房の入植の形態に由来しています。北海道などの近代開拓村は「母村」があり、集団で一か所から大勢で入植していることが多いのですが、童仙房の入植者は全国各地からいわば移民のような状態で入植してきており、さらに第二次入植の際は満州など「外地」からの入植者もいました。このため、多数の「他者」が童仙房を形成し、今日まで続く独自の「空間」と「時間」が生まれたいことです。

猿山隆子氏(京都造形芸術大学・非常勤講師)は、「子育てから保育へ」というタイトルで童仙房地区の保育所設立の歴史について報告されました。野殿・童仙房地区に保育園が開園したのは今からたった38年前の1979年。児童数は9名でのスタートでした。現在でいう無認可保育園というかたちですが、設立に携わった保護者の方々は「保護者立」という言葉でその独自性をあらわしてきました。当時は園舎となる建物が無かったため、自力で建設したプレハブを園舎とし、幼稚園教諭免許を持った2名が先生となつての開園でした。子どもたちを送迎するバスなどもないため、先生たちが出勤の途中で児童の自宅

および生活環境を引き上げることであり、その方法は教育的手段によることとして続けられる(『農家生活白書』第256号、昭和41年7月15日)とされ、農村の生活向上を志す地域の方々によって実践されてきました。

食料が十分でなく、栄養不良に悩んでいた家庭の主婦たちは、各都道府県の保健所で開催された栄養教室に通い、食生活はもろろん、生活環境や健康維持の向上をめざしました。銚氏がインタビューした方は、食生活改善推進員として活動していく中で、当時推奨されていた乳製品と肉の摂取や、栄養の偏りやたんぱく質と脂質の不足などが童仙房の食を取り巻く環境とそぐわないものであること、推奨レシピを数値通りに作って模倣することの「しんどさ」を感じていたといいます。現在はスーパーへのアクセスも容易となり、都市部と変わらない食物が手に入りますが、四季折々のキノコや山菜を楽しむ家庭が多く、野菜も自家栽培で多くの種類を収穫し、近隣同士で交換しながら生活しています。また、最近都市部でも人気が高いジビエ料理は昔から盛んに食されており、地域のものである食生活のありかたが見直されています。

童仙房に暮らす自分たちが歴史を作っていく



報告会夜の部

発表内容は昼夜共通で、夜は男性を中心に子どもたちを含む約20人が参加し、櫻井孝男氏(童仙房地区区長)は、各時代のリーダーたちが童仙房をどうしているかと考えていたのかを知りたい、またこれからそのようなリーダーをどう生み出していけるだろうかとおっしゃっていました。他にもこの研究の成果を記録と



報告会昼の部で報告する猿山氏

に立ち寄り、園へ連れて行っていたそうです。当時の保護者からの証言をもとに園舎内の見取り図が示され、プレハブの園舎は片側に人が集中すると床が傾くような造りで、本当に手作りでの開園だったとの証言も紹介され、いかに「保護者立」であったかがうかがえました。翌年には新園舎竣工のため、公民館の一面を間借りして保育を継続し、1981年には園舎が完成。以降少子化が進んだことにより近隣の地区で保育園の開園が相次ぎ、野殿童仙房保育園は小学校閉校と同時期の2006年に閉園しました。

保育園ができるまでは、母親たちは子どもを農作業の場に連れて行き、籠などに入れて畑のあぜに寝かせていたとのこと。保育園ができたことにより作業の効率も上がり、働き方に変化が出たという当時の保護者からの談話が紹介されました。保育園設立の1979年より前に子育てをされていたという出席者の女性からは、園が立ち上がった1979年より前にも保育園設立の話はあつたけれども上手くいかなかったこと、また保育園を経験していない子どもは小学校に入っても友達との接し方がわからず、まずは友達と一緒に遊ぶことの練習からはじまったというエピソードをお話してくださいました。猿山氏は、今後この保育園設立当時に入所していた当時の児童を探して聞き取りをしていきたいと締めくくられました。

最後の発表は銚純香氏(相愛大学・助手)。「食生活運動は(改善)だったのか」というタイトルで、童仙房地区の食文化と食生活運動がもたらした影響などを報告されました。戦後に政策として行われた生活改善普及事業の目的は、「農家の生活水準(経済、時間、労働、空間、物質)



およそ50年ぶりの再会を楽しむ参加者

してどう残してもらえるかに注目しているという意見もあがり、参加者それぞれの学びの場となりました。

参加者のお一人、内藤浩哉氏は、住む所を探して大阪からたまたま童仙房へ来て、一瞬で気に入ったといえます。受け入れてもらうまでの紆余曲折はあつたようですが、元々外部からの人々が寄り集まってできた地区ですから、受け入れる体制の下地があつたのかも

しれません。彼の4人のお子さんたちはみんな夜の報告会に参加し、熱心に発表に聞き入っていたのも印象的で、昼の部、夜の部ともに出席していた息子さんに話を聞いたところ、祖父母宅を訪れて都会の集合住宅で過ごしたこともあるけれど、童仙房の方が自由に生活ができて良い、家庭内で引越しの話が持ち上がった時もここを離れたくないと猛反対したと話してくれました。

住民の皆さんは、誰かに教えられて郷土史を知るといっただけではなく、聞き取り調査に協力しながら報告会のような場で経験や知見を伝えること、また誰かの話を聞くことにも積極的にでした。それは、大学の先生が来てくれたから彼らが何かをしてくれて地域が持ち直すかもしれないというどこか他人事のような意識でいることから、プロジェクトチームと協働することで、ここは自分たちの童仙房であり、自分たちが童仙房の歴史の一部を作っていくのだという自発的な思いをもつような、意識の変化があつたからではないでしょうか。この意識の変容には、プロジェクトチームの働きかけが大きく影響したと思います。今後童仙房の未来をどのように作り上げていくのか、まだ具像は見えないのかもしれませんが、住民の皆さんによって新しく紡がれる童仙房の未来に注目していきたいです。

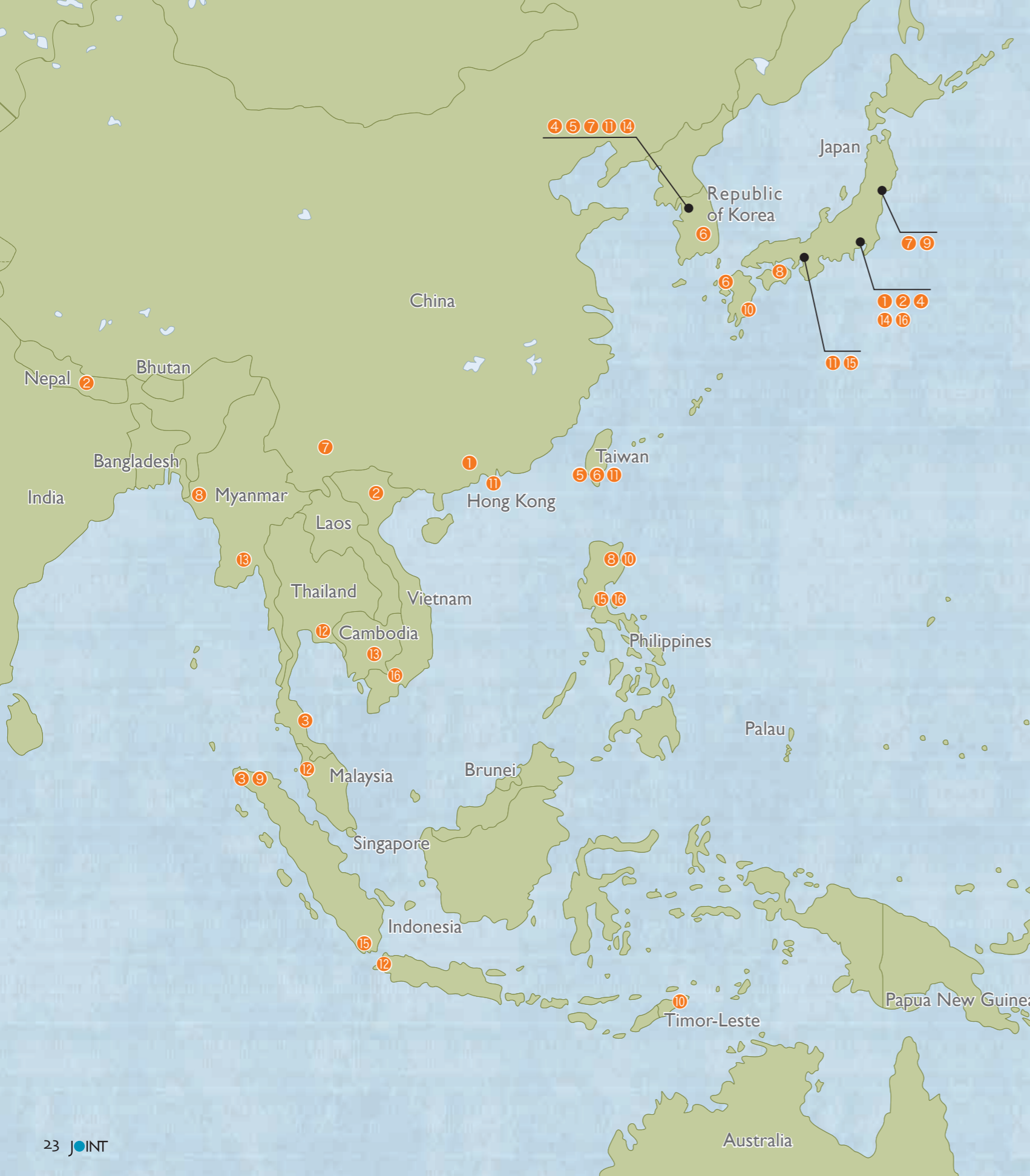
国際助成プログラム プロジェクト一覧 2017

2017年度に採択された国際助成プログラム16件のプロジェクト一覧です。

*地図上の数字は、各プロジェクトの主な活動地域を示しています。

*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

番号	代表者氏名	題 目	主な活動地域
A. 多世代・多文化を包摂する地域コミュニティ			
①	大浜 あつ子	「アジアの障がい児の社会的自立支援」に向けた日中二国間での運動による障がい児の社会的自立支援プログラムの構築	日本、中国
②	ディベシュ・カレル	多民族化の日本を捉える ― 共生を学ぶ留学生と日本人	日本、ベトナム、ネパール
③	ナビサー・ワイトゥンキアット	多様性を通じた平和構築を目指して ― タイ最南部の課題とインドネシア・アチェ州の教訓	タイ、インドネシア
④	毛受 敏浩	移住当事者による政策提言 ― 日韓の移住当事者の交流と学び合いを通じて	日本、韓国
⑤	チョウ・ユンジュ	結婚移民女性の自尊感情を取り戻す ― 視覚表現を通して	台湾、韓国
B. 新しい文化の創造：これからのアジアの共通基盤の構築			
⑥	李 春子	山・川・里・海を繋ぐ日・韓・台の「伝統の森」文化の保全と絆	日本、韓国、台湾
⑦	香坂 玲	日中韓における遺伝資源と関連する伝統的知識の活用と保全のための「東アジア・共感モデル」の構築 ― 伝統野菜と養蜂を題材として	日本、中国、韓国
⑧	山下 彩香	アジアの地方の文化の価値再発見のための竹を軸としたワークショップ教材の運用と3か国間ネットワーク構築	日本、フィリピン、ミャンマー
⑨	渡辺 裕一	コミュニティアートが被災地ツーリズムの新局面を提示する日本とインドネシア・アチェの協働プロジェクト	日本、インドネシア
⑩	阿部 健一	楽しい農業 ― 演劇ワークショップでアジアの農村をつなぐ	日本、フィリピン、東ティモール
C. オープン領域			
⑪	全 泓奎	東アジア包摂都市ネットワークの構築 ― 引き裂かれた都市から包摂型都市へ	日本、韓国、台湾、香港
⑫	コッチャゴーン・ウォラーアコム	気候変動対策の好事例を探る ― 東南アジアにおける都市のレジリエンスの向上にむけて	タイ、インドネシア、マレーシア
⑬	中村 英誉	カンボジア、ミャンマーにおけるアート×環境教育イベントの実施と教材開発 ― ゴミ問題に関する学びあいと解決に向けて	カンボジア、ミャンマー
⑭	上杉 孝實	躍動するアジアにおける基礎教育保障のための共同探究ネットワークの構築	日本、韓国
⑮	嘉田 良平	上下流連携による生態系保全と地域経済の両立をめざして ― アジア版地方創生への一提案	日本、インドネシア、フィリピン
⑯	松島 由佳	アジア地域における持続可能な有機農業の実践に向けた仕組みの構築 ― 日本・フィリピン・ベトナムの現場から	日本、フィリピン、ベトナム



ブルガリアの第2都市プロヴディフは、紀元前4000年(今から6000年前)に街が形成されたヨーロッパ最古の都市の一つである。

ギリシアより以前から人が集まり住み合う文化が始まった、世界で5番目に古い都市。街の中央にある歩行者専用の散歩道の地下には長さ240m、3万人を収容した古代ローマの競技場があり、地上にはオスマン帝国時代のモスクが穏やかに立っている。道のすぐ裏手にはブルガリア正教会があり、少し登った所にはローマ時代の円形劇場があり、異文化を超えた融合の都市風景が広がる。歴史のレイヤー構成が街の個性を引き立たせ、市民たちの歴史的景観の修復・継承への熱意が高いことが伺える。

私の出身地でもあるプロヴディフではブルガリア人はもちろん、古くからローマ人、ユダヤ人、アルメニア人、トルコ人、ギリシア人など、最近ではシリアからの難民も共に住んでいる。そういった異なる文化的、宗教的背景の人々はどのように平和に一緒に暮らしているのだろうか。

6000年前から、異なる人が集まってともに住む、長い文化・伝統・歴史があるこの街で、私たちは学ぶことがたくさんあるのではないかと強く感じ、本プロジェクトを開始した。この街のダイナミクスを理解し生かすことによって、世界の色々な地域課題を改善する一歩になるのではないだろうかと考えたのだ。

私の地元であるプロヴディフでの現地調査は、トヨタ財団の共同研究助成プロ

運動のステップになればと願ってこのワークショップをした。

会場として街中のブックカフェが素敵なワークショップ空間となった。ワークショップでは2つのグループの発表があり、ともにプロヴディフのユニークな物語を紡ぎ、ブルガリア語の「ザエドノ」、「together」が響きあった。

日本での経験を応用しつつ、提起したプログラムに想像以上に深い内容が現場から返ってきた。チームメンバーが撮りためた街の写真や絵本についての語り(幻燈会)をきっかけにして、写真を使って物語を創った。

子どもは言葉を覚えるのが早く、父親の通訳をしながら、親子で参加したシリア難民の少女は、『ドロボウ猫ペシヨの大冒険』と題した物語をグループをリードしながら見事に創り上げた。大冒険の経験の最中に「なぜ自分は一人なんだろう?」という気づきから、最後のめでたしめでたしに至るまで、とても深い物語だった。シリア難民の経験を想像してもその苦労は想像しづらいが、できあがった物語の深さ、明るさ、楽天さに、生きる力を感じずにはいられなかった。彼女のパワフルさに脱帽した。

もう一つのチームは、「本当の繋がりとは何かということ」、「少数民族、宗教の違い、発達障害、皆揃ってこそ私たちが生きる社会が成り立つ、そこには直接的コミュニケーションがなくて」といった大きなことを面白おかしい物語に託して発表した。遠い日本からやってきた私たちから気づかされることや、

「私」のまなざし 19

ヨーロッパ最古の街で参加型の絵本をつくる

文・写真◎イヴァン・ボテフ
東洋大学国際教育センター講師(国際地域学 博士)



活動に参加してくれたプロヴディフ市民の方々(ローマ人、トルコ人、アルメニア人、シリア人、ブルガリア人)



今回の幻燈会とワークショップの様子



2019年ヨーロッパ文化都市として選ばれたプロヴディフ市



街の中心部の地下に遺るローマ時代の競技場

プロジェクトの一環として行っている。

プロジェクトメンバーと協力者は、バランスよく日本人とブルガリア人、単一な分野の専門家ではなく、多分野のエキスパートが参加し、各自の経験と知識を活かしているいろいろな角度から物事をみるグループである。さらに大学生も巻き込んで、この歴史と文化の宝物あふれる街で、さまざまな経験をしてもらっている。その場で協力してくれる人もたくさんいる。多様な参加者のおかげで発見と成果が感じられ、全員にとって新しいことを学ぶ創造的現地調査である。トヨタ財団の支援によって、地元のプロヴディフでこのような研究ができ嬉しい限りである。

このプロジェクトは絵本を活用し、また「共生」をテーマに絵本を創作していく過程を研究している。欧米では絵本を通じて、住まいや街のあり方について子どもの頃からイメージづけをしているのではないかと考えられている。絵本は、子どもの環境やコミュニケーションに対する意識喚起をもたらす。さらに住民主体で動くためのきっかけづくりとして、絵本からスタートすることは効果的な方法の一つではないか。絵本からはじめること、自分たちにも何かできるのではないかという思いを引き起こすことができるからである。

2017年2月、そして8月に再びプロヴディフを訪れ、市民と難民の参加による「幻燈会」と「わたしたちのまち」というビジョンゲームを実施した。多様な人たちが、お互いを認め合い、地域に愛着を持てるような仕掛けとしての「地域絵本づくり」という

当たり前で忘れがちなことをもう一度意識することの大切さを学んだと感想を寄せてくれた。絵本や幻燈会は言葉だけでなくビジュアルにうったえることで、発想や可能性を広げることができる。

地元専門家やキーパーソンの巻き込みもたくさん学ぶことがあった。参加してくれた大学生たちの語学力とチーム力、また彼らの先生の適切な指導あつてこそ成功したワークショップだったのではないか。ワークショップ最後のまとめは「ブラゴダリヤ」(ありがとう)となった。感謝を分かち合うことが「together」。このコンセプトを基にして、共生絵本の創作に私たちのチームとあらゆる協力者とともに今後も挑んでいきたい。

今回の経験を丹念に分析し、次の展開に繋いでいきたい。参加型の絵本づくりは、プロセス自体にすぐ価値があるということに今回いろいろな人に気づいてもらい、小さなカフェをはじめ、各地域でいくつもそんな運動が立ち上がっていくような種まきができるのではないか。第二次世界大戦中ユダヤ人を守り、多様な民族、宗教が共存してきた寛容の歴史のある街だからこそ、私自身、異文化共生の研究の意味がクリアに見える、とてもよい学びを得て日本に帰国した。

●イヴァン・ボテフ(東洋大学国際教育センター講師(国際地域学 博士))
2015年度研究助成プログラム助成対象「多様な民族で構成された21世紀のヨーロッパにおける共生方法の探求——避難民も含めて共に住むために、どのように地域帰属意識を醸成させていくか——」

「準喫茶カガモク」がオープンしました!

●加賀道(トヨタ財団リサーチフェロー)

実家のある宮城県鳴子温泉で在宅勤務を始めて2年が過ぎました。実は、昨年9月から夫がこつこつ建築してきたお店が6月末にオープンしました! 鳴子にちなんだこけし雑貨を作っている夫は作品を販売する店舗を、そして私は、地域内外のさまざまな人が集える場を作りたいと考え、喫茶店兼雑貨屋の建設に取り組んできたのです。私も、休日や早朝の時間を利用して、ささやかながらも積極的に建築作業のお手伝いをしました。

建築に際しては、材の墨付けから刻み作業、内装など、木工事すべてを夫が手掛け、何ができるのだろうかといぶかしげに見ていた地元の人たちも、雨の日も吹雪の日も早朝から日没まで作業を続ける夫の姿を見て、温かい飲み物を差し入れてくださる方や、自宅を建てる時のために取っておい



屋根の野地板張りも手伝いました

たという素晴らしい木目の材を譲ってくださる方まで現れました。地元の木工好きの方が遣した杉板は、地



準喫茶カガモクの店内

建具などを使い、沢山の方々の想いの詰まった店舗が完成しました。

お店の名前は「準喫茶カガモク」。純喫茶ではなく「準」喫茶。単に美味しいコーヒーを提供するだけでなく、さまざまな人が集い、新しいアイデアの生まれる場にしたいたいという想いと、クスッと笑えるようなこけし雑貨がたくさん顔をのぞかせる面白い空間にしたという想いを込め、喫茶店に準ずる店というシャレを盛り込みました。

メニューも、手作りのこけしロースターで自家焙煎したこけしコーヒーのほか、近所の豆腐屋さんのおからを使ったこけしドーナツや、鳴子の名所をイメージした地獄谷カレー、

域おこし協力隊として鳴子漆器を修行中の青年2名の手で重厚なカウンターに生まれ変わりました。そのほか、我が家の倉庫に眠っていたちゃぶ台や父の勉強机、恩師に譲っていた古

我がまちが発祥の地とされる「しそ巻き」を丸ごと一本包んだしそ巻きロールパンなど、地元色満載です。

この店舗の建築や営業に当たり夫婦で心がけたのは、地元の資源をふんだんに使うこと、手間を惜しまず工夫を凝らし手作りにこだわること、地域の人を巻き込む仕掛けを作ることなどです。インターネットで何でも手に入る時代ですが、あちこちにこけしが潜む手作りの店舗を目当てに、遠方からわざわざ足を運んでくださる方が大勢いらつしやることは、何もないと言われてきたこの地域に、沢山の資源があり、魅力があり、可能性が潜んでいることを地元の方々に示すことにもなるのではないかと思います。まだ始まったばかりですが、営業日以外にも、地域づくりに関心のある人々が集い、繋がる場となるようさまざまな企画に着手し、この場から新たなアイデアが生まれ始めています。

私はこれまで、仕事で全国各地を巡らせていただき、沢山の魅力的な人や活動に出会いました。そして、小さな取り組みが社会を変えることを学びました。これからは、私がこの地で、皆さんから得た知見を活かし、新たな価値を生み出すべく、行動していきたいと思っています。



お店の看板メニュー「こけしドーナツ」

な価値を生み出すべく、行動していきたいと思っています。

*準喫茶カガモクのオープン記念としてオリジナルのこけしグッズをプレゼント! 詳しくは29ページをご覧ください。

THE TOYOTA FOUNDATION

トヨタ財団 ジャーナル

October 2017



【国際助成プログラム】

韓国慶州「東アジア市民社会フォーラム」への参加と、清州プロジェクト訪問

8

月23日から28日にかけて、韓国の慶州と清州を訪れました。最初の訪問地である慶州での目的は、第8回東アジア市民社会フォーラム(East Asia Civil Society Forum)に参加することです。EACFは日本・中国・韓国の3か国の、市民同士の草の根レベルでの相互理解促進のために、2009年から年に一度開催される大規模な国際交流フォーラムで、開催地は一年ごとに日中韓の



慶州で開催された第8回EACFの様子

ランティアセクター長による災害時のボランティアランティナーコーディネーターの仕組みと運用時における課題、京畿道共有市場経済政策補佐官による共有市場経済のプ

持ち回りで行われています。

トヨタ財団は、昨年11月に東京で開催された第7回EACFに対して、他のいくつかの助成財団と共同助成を行った縁で、引き続き筆者(楠田)が実行委員会メンバーとして今回のフォーラムにも参画することになりました。

EACFでは、その年のホスト国が中心となつて決定したテーマに対して、参加各国がそれに見合った報告者をアレンジし、日中韓からの参加者がその共通テーマに対して2日間にわたって議論を行います。今年のテーマは「被災地におけるまちづくり及びコミュニティ再生」。日本からは、基調講演が宮定章氏(まち・コミュニケーション代表理事)、続く事例報告のセッションでは大西健丞氏(Civic Force代表理事)、中尾公一氏(県立広島大学)、西川正氏(ハンズオン埼玉理事)がそれぞれ発表を行いました。

一方、韓国からは、今回のスポンサーでもある慶州市長の基調講演に続き、韓国中央ポ



世界遺産に登録されている慶州良洞村

ラットフォーラムによるコミュニケーション形成の事例などが報告されました。阪神・淡路、東北、そして熊本での大規模な震災への対応に加え、紛争地での緊急支援や、セウォル号転覆事故にかかる被害者家族の支援まで、日韓両国からさまざまなトピックが提起され、会場を埋めた約150人の参加者と活発な議論が行われるとともに、当該テーマにおける市民社会組織の役割や、人びとが交流を行う具体的な場の重要性が改めて浮き彫りとなったのでした。

「仏国寺と石窟庵」、「慶州歴史遺跡地区」、「河回と良洞」と、市内に3つの世界遺産を抱えるという世界でも稀な歴史都市で、2日間にわたって行われたフォーラムは実り多いものとなりました。なお急な国内の事情により、今回中国からの参加者は1名のみになりました。今回中国からの参加者は1名のみになりました。返すに期待したいところです。

続

いて訪れた清州での目的は、2016年度から国際助成プログラム「アートの創造性を通じた子どもを育む環境づくりの考察」(D16-N-0197) 代表者: 山野真悟)の現場を

訪問することでした。本プロジェクトは、日韓両国で顕在化する子どもの「教育格差」の問題に対して、アートの力で解決を目指すものです。

具体的には、この地で活動するアート団体、653芸術商会とPublicArtが、日本での実績豊富なNPO法人黄金町エリアマネジメントセンターと連携し、1年目は日本のアーティストが清州に、2年目は韓国のアーティストが黄金町に滞在し、地域の子どもたちを巻き込みながらパブリックアート作品を協働制作するというもの。筆者が訪れたのは、日本からのアーティスト・野田智之氏の清州滞在最終盤にあたり、およそ1か月半にわたって子どもたちとともに創りあげた作品のお披露目の場にちようど居合わせる事ができました。



韓国清州の子どもたちと協働制作したパブリックアート作品。写真の男性が野田智之氏

した。

「キネティックアーティスト」として、絵画やオブジェをモーターで駆動させるのが特徴的な野田氏の作品。完成お披露目の場では、自分たちの作品が織りなす不思議な世界観に、集まった子どもたちは興味津々でした。

なおこの作品は今年いっぱい、公道に面したパブリックスペースに展示されます。制作途中から地元テレビにも取り上げられたこの活動。来年は韓国から来るアーティスト(Kinimiss氏)が、黄金町の子どもたちとどのような作品を創りあげるのか、今から楽しみです。(楠田)



【2016年度 東日本大震災特定課題】東日本大震災特定課題中間報告会を開催して

9月22日、陸前高田市にある特定非営利活動法人りくカフェが運営するコミュニティカフェ「りくカフェ」にて、2016年度東日本大震災特定課題助成対象プロジェクト中間報告会を開催しました。東日本大震災特定課題は、「復興公営住宅における良質なコミュニティづくり」をテーマとして、

INFORMATION

トヨタNPOカレッジ「カイケツ」成果報告会のご案内「11月28日開催」

2017年度「トヨタNPOカレッジ」カイケツ(全5回)の成果報告会を、11月28日(火)にトヨタ産業技術記念館にて開催いたします。

本講座は、トヨタ流の「問題解決」という考え方・手法を、グループ指導を中心とする講義形式で学ぶNPO向けの講座です。成果報告会では、受講生たちが「問題解決」の考え方・手法を用いて、自組織の課題解決に半年間取り組んでこられた内容と成果について、トヨタ式A3資料を用いて報告します。詳細は当財団ウェブサイトをご覧ください。

PUBLICATIONS



〈土〉という精神
アメリカの環境倫理と農業
●発行：農林統計出版
●著者：ポール・B・トンプソン(太田和彦訳)
●価格：3,700円+税

2013年度研究助成プログラムの助成対象プロジェクト「自然資源の持続可能な保全に向けた制度設計——(仮称)土壌保全基本法の制定に向けた制度設計——」(代表者：村田智吉氏、DTR-0053)より成果物のお知らせをいただきました。本書は助成プロジェクトに関連する書籍で、共同研究者である太田和彦氏が翻訳しています。

2017年4月から1年間の助成を実施しています。

会 前半は、助成対象7団体による中間報告が行われました。各団体には、「実施内容」「良かったこと」「うまくいかなかったこと」「助成期間の後半に試してみたいこと」「助成期間終了後に取り組みたいこと」について報告いただきました。うまくいかなかったこととして、住民同士のつながりづくりは進みつつある一方、支援団体中心の運営から住民主体の運営へどうつないでいくかが共通課題となっているようです。

後半は、「3年後に目指すコミュニティの姿」『コミュニティ形成』の先の役割について考えよう」をテーマとして、宮城県石巻市北上地域の佐藤尚美氏(We are one 北上)、秋田県横手市の奥山良治氏(狹半内共助運営体)・八嶋英樹氏(特定非営利活動法人秋田県南NPOセンター)による他地域事例の報告とグループワークを実施しました。北上地域、横手市はいずれも住民の共助により地域の課題解決(雪かき、移動支援、見守り等)に取り組んでいます。二つの事例の共通点は、①住民へのヒアリング、合意形成を丁寧に行っていること、②高齢世代を含む住民が役割をもって地域の課題に向き合う仕組みを作っていること、③それを実現するためのコーディネートを担う組織(We are one 北上、秋田県南NPOセンター)が機能していることです。事例報告後のグループワークは、東末真紀氏(神戸大学学生ボランティア支援室)のファシリテーションのもと、参加者が深掘りした



会場となった「りくカフェ」

「お茶っこ」のようないきいきとした男性性にとり参加してもらおうかなど、「男と女のデザイン」(つながりデザインセンター新井和幸氏)についての重要性も複数のグループで共通して議論されていました。

被災地が向き合う課題は、日本全体がこれから向き合わざるを得ない課題と共通しています。この地で培われた知恵の共有が、今後はますます重要になると感じました。(喜田)

JOINT 読者プレゼント

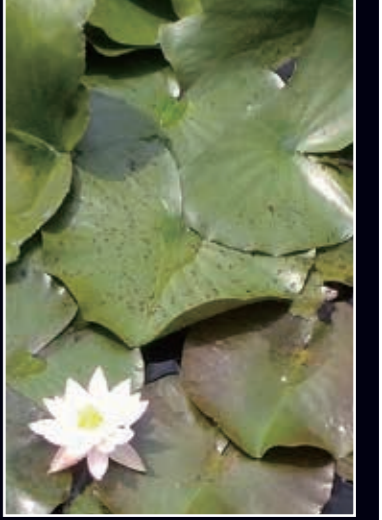
本誌連載中の「お茶っこ通信」(26ページ)より、準喫茶カガモクのオープンを記念して、カガモクオリジナルのこけしグッズをプレゼントいたします。ご希望の方は同封のハガキにA賞、B賞、C賞のいずれかをご選択のうえご応募ください。2017年11月30日(木)の消印有効です。当選は発送をもって発表に代えさせていただきます。



ドーナツ1個引換券のおまけ付き!!

準喫茶カガモク

【所在地】宮城県大崎市鳴子温泉泉川渡49
【基本営業日】毎週 金・土・日*
【営業時間】10:00~16:00
【ブログ】<http://kagamoku.jugem.jp/>
*実際の営業日はブログ等でご確認ください



童仙房で見かけた睡蓮の花(P.18参照) [Y.N.]

【編集後記】

LAST WORD

改めて「初心忘るべからず」の意味を考えてみました。【M.O.】

●●JOINTの企画・検討メンバーとして久々に参加させて頂きました。今号の特集は「地域資源」がテーマでした。日頃、プログラム横断的に物事を考える機会がありませんが、一つのテーマを切り口に、各プログラムの事例を丁寧に見ていくことで、さまざまな共通点が見えてきたように思います。今後も、プログラム横断的に特定のテーマを掘り下げてみていくような場を意識的に作りたいと思いました。

また、山岡さんとの座談会では、POに必要な力や民間助成財団の社会的な役割について考えるヒントをたくさんいただきました。先輩方から渡されたバトンを私たちはこれからどのように次へとつないでいくのか。めまぐるしく変化する社会の中で、私たちは広い視野を持ちながら、自分たちの立ち位置や役割をしっかりと考えていかねばならないと感じました。今後の対話シリーズではどのようなお話が聞けるのか

今からとても楽しみです。最後に、お忙しい中、座談会にご参加くださった山岡さんにこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。【N.W.】

●●●久しぶりに「活動地へおじゃまします」を執筆しました。京都からかなり来たけどまだこの林道が続くのかな……と若干不安になりかけたところに突如として目の前に集落が現れた時の、まるで幻を見ているのかと思うような光景がとても印象的で、今でもよく思い出します。

携帯電話の電波が心許ないほどの山奥で、報告会夜の部開催中には学校の裏手あたりから鹿の鳴き声が聞こえており、夜半にはカエルや虫の合唱で目が覚めるほど。日頃東京では体感できない闇の濃さにもぞくぞくしました。

誌面には書ききれなかった秘話もたくさん伺うことができました。お世話になった童仙房の皆さま、前平先生をはじめチームの皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。【N.Y.】

【N.Y.】

【N.Y.】

●「初心忘るべからず」という言葉があります。この言葉をご存じない方はいらっしやらないでしょうか、元々は、今から650年前の室町時代に能を芸能として完成させた世阿弥が、その芸術論をまとめた『花鏡』の結びの段において、能の奥義として記したものです。これは「物事に慣れてくると慢心してしまいがちであるが、初めの志を決して忘れてはならない」という戒めの意味で使われているのが一般的だと思うのですが、世阿弥はもう少し複雑な意味で書いたようです。

世阿弥の言う「初心」とは、「芸の未熟さ」のことであり、若い時の初心、人生の時々の初心、そして老後の初心と、人生の中にはいくつもの初心があって、それらを忘れてはならないと書いています。つまり、若い日の未熟な状態から抜け出し、壮年期から老後に至るまで、年相応の芸を学んだ時の初めの境地を覚えておくことで、限らない芸の向上を目指すことが出来るかと説いているのです。芸を極めたと思う時こそ、あえて過去を断ち切って新しいことを始めなくてはいけないという戒めでもあります。

今回の座談会にご登場いただいた、私どもの財団の大先輩である山岡義典さんのお話を伺って、

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいは同封のハガキにてご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.25

発行日 2017年10月23日
発行人 浅野有
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <http://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey

—旅の途中で—

東日本大震災特定課題助成対象プロジェクト中間報告会で訪れた陸前高田市の箱根山テラスにて、空の下での朝食(本誌P.28参照) ●写真撮影：喜田亮子





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



UD
FONT

